

私が陶芸を始めた35年前の陶芸界は、「伝統工芸」と「現代陶芸」というジャンルで二分されていた。

伝統工芸 / 民芸の師匠のもとで陶芸を学んだ私にとって、陶芸作品は使うことで成り立つことが当然だった。当時の現代陶芸では彫刻的な作品が多く見られたが、そこにどんなコンセプトがあろうと表面的な形と表情しか見えず、大きな違和感を覚えていた。

表面的な形を追い求める陶彫刻は内側の大きな空虚を置き去りにしていく。

焼き物の性質上、焼成時の水蒸気爆発や亀裂を防ぐために内側の中空構造が必要となる。故に大きな作品になるほど、その空虚は更に大きくなる。そして内と外を完全に分断し、中身のないハリボテのような構造となる。

工芸を基礎とし、器製作がスタートにある私にとって、内側の形は大きな意味を持つ。修行時代、ろくろの練習時には、師匠から「中身を作れ」という助言をいただいていた。中の形をしっかり作ることで自ずと外が決まる。私にはその考えがろくろの技術以上に身についてしまっている。

私自身も陶彫刻作品は作り続けてきた。工芸的な「内と外」の感覚を彫刻作品に反映させるようになったのはこの10年ほどである。かつての作品シリーズ『Dark Patina Fruits』や『つち大根』においても、内側からの形づくりは意識的だった。そこに、日本的な工芸感覚と現代陶芸の合流を試みていた。

そして6年前、スピーカーのエンクロージャーと出会った。音の通り道となる空間は、空虚であるしかなかった陶彫刻の内側に重要な意味を持たせてくれる。手探りで始めたバックロードホーン式のエンクロージャー作りでは、内側の構造を作ることで自然と外側の形が現れてくる。

無意識の形というべきか、それ以前の作品製作とは異なったプロセスで現れる形は、私が今まで培ってきた感覚や私の意思だけでは生じ得ない形である。